

貴司山治宛堺為子書簡（全八通）

翻刻・注 村 田 裕 和

「貴司山治宛堺為子書簡」について

伊藤 純

貴司はかつて、絲屋寿雄氏（吉村公三郎監督の映画を多数制作した近代映画協会の実質的経営者で、大逆事件の研究家）と親交があり、大逆事件関係の知識をいろいろと得ていたようで、それに関係する小説を書こうとした形跡もある。

そういう関連もあつてか、一九五五年頃、堺為夫人だけでなく、築比地仲助氏、添田知道氏らにも取材を試み、最後の生き証人というべきこれらの人々から“明治の反逆者”たちの生の風貌を聞き留めようとしている。この書翰類はその一つである。

解題

村田裕和

明治・大正期の社会主義者堺利彦の夫人堺為子（一八七二～一九五九）が、貴司山治（一八九九～一九七三）に宛てた自筆書簡全八通を翻刻する。堺（旧姓延岡）為子は、『平民新聞』に掲載されていた平民社の台所方募集にに応じて上京、堺利彦と明治三十八年に結婚した。彼女の生涯については近藤真柄『わたしの回想』上・下（ドメス出版、一九八二）、鈴木裕子

編『平民社の女たち』（不二出版、一九八六）、林尚男『平民社の人びと』（朝日新聞社、一九九〇）などにあたられたい。

貴司山治は、「宇田川文海と管野すが子」（『文化評論』第六号、一九六二・五）（朝日新聞社、一九九〇）などにあたられたい。

「二度ばかり訪ねて老齢のため子さんから、すが子の話をたつぷりきかされた。ため子夫人はあとから私に何度か手紙をくれてすが子の思い出を補遺してくれた。二年たつてため子さんもなくなり、遺された手紙は貴重な文献となった」と書いている。偶然、晩年の宇田川文海（明治前期に大阪で活躍した新聞小説家）に会ったことがある貴司は、のちに絲屋寿雄『幸徳秋水伝』（一九五〇）で、管野須賀子が文海に師事していたことを知る。文海の出でくる長篇と、秋水を中心とする戯曲を死ぬまでに書きたいと考えていた貴司は、管野須賀子が意外な共通項として浮かび上がったことさらに興味をかき立てられたのであろう。

堺為子の語る管野須賀子像は、生前を直接に知る女性同志の証言として貴重である。また、その晩年にいたるまで、管野須賀子の顕彰を切望していたことも注目し値する。五年前に神崎清編『大逆事件記録第一巻 獄中手記』（一九五〇年）が出て、管野の獄中手記『死出の道艸』が発見・紹介されたことも、為子が記憶をあらたにする契機となったであろう。

なお、貴司が同時期に問い合わせていた築比地仲助は、巷間に流布する管野醜婦説を否定し、「結論から云へば菅野は相当な美人であつた」（昭和三十年四月三日付「消印四日」貴司山治宛書簡―未翻刻）などと証言してい

る。

書簡は全部で八通ある。発信日と郵便種別は下記の通り。

- | | | |
|---|-------------|-----|
| 一 | 昭和三十年五月七日 | はがき |
| 二 | 昭和三十年五月十三日 | はがき |
| 三 | 昭和三十年五月十九日 | はがき |
| 四 | 昭和三十年六月一日 | 封書 |
| 五 | 昭和三十年六月十三日 | はがき |
| 六 | 昭和三十年六月二十日* | 封書 |
| 七 | 昭和三十年六月二十六日 | はがき |
| 八 | 昭和三十年七月六日 | 封書 |

*「堺利彦宛今村力三郎書簡（昭和六年九月二十七日付）一通」の写しを含む

貴司山治の「日記」（二〇一〇年刊行予定）によれば、その頃頻繁に会っていた山辺健太郎に案内してもらい同年三月二十三日に、「幸徳秋水の弟子であった築比地仲助老人を訪問」している。その後、四月二日、二十五日にも訪ね、二十七日には、近代映画協会で絲屋寿雄から「幸徳談」をきいている。堺為子訪問は五月二十一日であった。同日には添田知道宅も訪問している。同年の「日記」はその後ほとんど記入がない。

翻刻掲載にあたっては、貴司山治著作権継承者伊藤純氏および、堺為子著作権継承者近藤千浪氏の了承をえた。さらに伊藤氏には右紹介文をお寄せいただき、近藤氏には翻刻にあたって懇切丁寧な助言をいただいた。心より感謝申し上げます。

〔凡例〕

- 1 書簡に関する情報
 - ・著者自記の日付を見出しに取る。
 - ・消印を「」内に記す。
 - ・はがき・封書の種別、枚数、筆記具等を記す。
- 2 受信人（宛て先）・発信人に関する情報
 - ・はがきの〈表〉、封書の〈表〉〈裏〉にある受信人（宛て先）・発信人の情報は、それぞれ、住所、氏名、脇付の順に整理して記す。日付その他の書き込みは次行に一字下げて記す。
- 3 本文の翻刻
 - ・削除・挿入は反映させた形で再現する。傍点・傍線は原文のまま。衍字・脱字もすべて原文のままとする。
 - ・変体仮名・合字は現行通用の平仮名に改める。
 - ・句読点が「。」と判読できる場合、「。」または「。」とした。
 - ・段落改め以外の改行は再現しない。ただし、特殊な配置の場合その限りでない。
 - ・一字あけ（スペース）も原文のまま。ただし、句読点のない文末などに一字あけをほどこした箇所が若干ある。

書簡一 昭和三十年五月七日

〔田園調布 30・5・7 後0―6〕

はがき ペン書

〈表〉

（宛て先）武さし野市吉祥寺五三四 貴司山治様

（発信人）大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

五月七日 電話番号 田園調布(72) 六〇四五

〈裏〉

貴司山治様

堺為

御はがき拝見、仰せのおもむきよく承知しました。

何にぶん 私などはモウとても年よりまして、すっかりだめになつて居りますので、何等お役に立つようにおもはれません、けれど、一度おめにかゝりまして、お話し承りたいと存じます。どうぞいつにてもおいで下さいませ 御待ち申上げて居ります。

なをおいでの節、日時お電話給はれますれば幸甚

五月七日

書簡二 昭和三十年五月十三日

〔田園調布 30・5・13 後0―6〕

はがき ペン書

〈表〉

(宛て先) 武蔵野市吉祥寺五三四 貴司山治様

(発信人) 調布大塚町六〇三 近藤方 池上線 大塚駅前三井銀行向

ひ側 堺為

〈裏〉

五月十三日

先刻はお電話下されありがとうございます①。

それでは十八日、おんまち申上げて居ります。

何にもく御めにかゝりました上にて。

申上げるのを 私方住所はつきり申上げますと

忘れましたので 新宿方面から五反田に池上線にて

一寸こゝに

調布大塚駅下車駅前の三井銀行

の前、材木屋が眼じるしにて其トナリ。

注

① 先刻は：貴司山治「日記」(五月十二日)に、「夜山辺(健太郎)君くる。十八日一しよに堺為子訪問を約束する」とある。その翌日の電話。

書簡三 昭和三十年五月十九日

〔田園調布 30・5・19 前8―12〕

はがき(往復はがき返信用) ペン書

〈表〉

(宛て先) 武蔵野市吉祥寺五三四 貴司山治様

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤内 堺ため

五月十九日

〈裏〉

昨日は雨天のためおいでをおやめになりましたよし①。そのせつ次は廿一日とのお話がありました。土曜日として家族それく晴雨両様のヨテイをたてますので、一應おことわり申上げます

勿論当日だと差支へがあるとは、きまつていませんが、お約束しておいて、雨だとあくというのも不自由でございますので。

注

① 昨日は：貴司山治「日記」(五月十八日)に、「雨。土砂ぶり。山辺君、一しよに堺為子訪問の約束であったのだが、あんまり日和が悪いので二十一日に延期。」とある。為子は一方的な延期に不快を示している。貴

司らは結局二十一日に訪問。

書簡四 昭和三十年六月一日

□□□□□□ □・6・1 □6—□□

封書 便箋四枚 ペン書

〈封筒表〉

(宛て先) 武藏野市吉祥寺五三四 貴司山治様 平信

〈封筒裏〉

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

三十年六月一日

〈本文〉

過日は御来訪をいたゞきまして有難く御礼申し上げます、

其節 菅野^①の事に對し当時の私の感想をのおたづにあづかりましが、いろいろ考へさせられました、

当時の社会主義者は、同志といへば 一家親類と思つて居り 共同責任とは利彦さん^②がいつも言つて居りましたので 一寸口外出来ない事情もございました、

又 入獄中の人に捲き添えされてはそのその心配もありましたのでその事で一杯ございました。

後日、九月出獄した人の話でわかりましたが、獄中でも随分あやしく、心配しましたそうであります、

全く赤旗事件^③で捲き添えで引つばられ二年の刑をやつと終えた秋、また捲き込まれましたはとの心で人皆共にケイ戒して居りました。おめにかゝりました節、菅野さんの感じを申し上げませうと思ひながら、忘れて了ひました。

須賀子さん、は

中肉中背と申すか、顔は、ひらおもてなり、眼は すぐしく、ちつとひとみを すえて見られますと随分みりよ局的で、まつ毛の長い黒かつた事、丁度此節流行のつけマツゲの様でした。そして映画女優京町子^④の眼のやうでした

頭髮はすばらしくふさふさとしためづらしいよい毛でした。多うたぶさの毛で、其頃のひさしがみにふつさりと女同志でもほれくするかみでした。其頃は幸徳さん^⑤との事もなにもない頃で女同志で私はまげのよく結へたのをほめた、えましたのです、そしたらめの前でピンを抜いてするくとかみの毛をときほいいて見せて下さいました、それは曲げの結ひかたを話のたねになりました。で大たぶさの黒髪の根元以つて前にさらつと、丈長く流して膝よりずつとあまりましたのを、指先きにくるくくと巻くやうにして結び上げて格こうよく頭に上せて見せて下さいましたまことに手ぎわよくよいかみかたちでございました。

此のような事、築比地さん^⑥なら御承知だらうと思ひます。女ですから私のようなやぼてんでも是れだけは申し上げます、一度築比地さんにおき、合せ下さいませ、

此時以来、私はん野に習つた結び方を貧弱な髪のままげはん野流^⑦に結んで居りました。

大変きたない文字ですがめが薄くなりましたので是れでおゆるし願ひ上げます、

若し築比地さんにおき、合せの時には
お電話小石川(92) 1469 築比地仲介様

先日の御礼申上げます序でに一寸申上げました。

結構なおみやけをいたゞきまして有難く御礼申上げます

どうぞ御気易くお立寄り下されませ

どうも気候が 梅雨時に近づきますすやうですから御大切になさいま
せ。

堺 為

貴司山治様

近藤の電話田園調布(72)

(六〇四五)

秋水氏 と 堺とは 見たところ

ジツと笑ひ 堺は大き笑

顔したのみで ふ声は遠くに

あまり声出して いても、又堺君が

笑はない人 哄笑が初まつてると、

注

① 菅野 菅野須賀子(幽月、すが、スガ)。一八八一〜一九二一。

② 利彦さん 堺利彦。一八七二〜一九三三。社会主義者。為子と再婚。

③ 赤旗事件 一九〇八(明41)年六月二十二日、山口孤剣出獄歓迎会後、

大杉栄らが「無政府共産」などと書かれた赤旗を振って路上に出、警官隊と衝突し十四名が逮捕された事件。大杉栄の重禁錮二年六月罰金二十五円

を筆頭に、堺利彦二年罰金二十円、荒畑寒村一年六月罰金十五円など、重
い判決が下されたものの大逆事件を免れる決定的なアリバイとなった。

④ 京町子 正しくは京マチ子。一九二四〜。女優。黒澤明監督『羅生門』
(一九五〇)などに主演。

⑤ 幸徳さん 幸徳秋水。一八七二〜一九二一。無政府主義者

⑥ 築比地さん 築比地仲助。一八八六〜一九八一。『革命歌』『南葛労働者
の歌』の作詞者。

⑦ かん野流 為子は赤旗事件で夫が下獄中、髪結を学び、ただちに開業し
て家計を維持した。その観察眼がうかがえる。

書簡五 昭和三十年六月十三日

「田園調布 30・6・14 前8―12」

はがき ペン書

〈表〉

(宛て先) 武蔵野市吉祥寺五三四 貴司山治様 御許に

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

六月十三日

〈裏〉 *はがき横置き

御旅行、お帰りのお手紙拝見、いろく私的なつかしい町名、お初
天神、露の天神、つな敷天神、など思ひ出しています、あの辺には
幸徳さんも居りました、大江橋夕涼みなどされました由。序での時
にかん野のこと少し申添へたいのですけど、本日偶然手許にかへつ
て来た昔の石川半山の文書があります、秋水との友人で、かん野の
批評が一寸、御参考になりはしないかと思ひますのでお知らせいた

します。写してさし上げもとは存じますが、おたづねいたします。彼女は大阪にて木下尚江^②に社会主義の洗礼うけて、などをりますから、いろいろとおめにかけたいとも存じまして、どうも梅雨のかげんかして老人もつかれぎみにて、眼がどうもイけませんで文字がうまく書けませんで失礼御ゆるし下さいませ。一寸御尋ねまで かしこ

注

- ① 石川半山 石川安次郎。一八七二～一九二五。新聞記者・政治家。中江兆民のもとで秋水と知り合う。「中央新聞」でも同僚。
 ② 木下尚江 一八六九～一九三七。一八九九(明32)年、「毎日新聞」入社。一九〇三年、大阪での講演会に須賀子が訪問。

書簡六 昭和三十年六月二十日

〔田園調布 30・6・20 前8―12〕

封書 便箋三枚 ペン書

〈封筒表〉

(宛て先) 武藏野市吉祥寺、五三四 貴司山治様

〈封筒裏〉

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

〈本文〉

*二枚目一行目は欄外書き込み。二行目「今村力三郎氏の手紙…」以降も為子の手と思われるが、筆跡に力があり、筆写時期は神崎清に貸与する以前かと思われる。

貴司山治宛堺為子書簡 (全八通)

梅雨じめりで毎日いやなお天気でございます、お障りなくや、永く神崎清氏^①方へいつて居りました書類がかへつて参り其中に別紙のものがありまして中々に感銘深く読んだと塩田庄兵衛氏^②にほめられましたので管野の事といへばあなた様も御同様に興味をお持ち下さると思ひましておめにかけます、

ほんとうにつくぐくかんのさん、思ひ出します、世の中から苛じめられた婦人ですし やさしい 情のあるかたでした 妹の秀子^③をかあいがること、羨やましく思た事があります、寒村^④のことをかちやくと呼びました 親しみのある言葉をかける婦人、あの頃には珍らしいことでした。

今村^⑤さんの手紙は戦争後ですから、あまり知られてはいず知らせる人は山川^⑥さんだけです 荒畑^⑦さんはお気の毒でいいひませぬ、それで貴司様はかんの研究家だから、失礼な書きざまおめにかけます

為

貴司山治様 悪筆御免下され

*以下、二～三枚目

貴司様におめにかけます

今村力三郎氏の手紙 原文の写し、

幸徳の手帳^⑦に、二十八日の正午休憩時間とあるから、

明治四十三年十二月二十八日のことである、此の日の朝、公判開廷前に、堺君から、幸徳の母^⑧が昨日郷里で死んだと話されたので、僕と花井君^⑨と相談して、いつそ幸徳に告げた方が良からう、と午前の法廷が終った時立會検事の板倉松太郎君^⑩の許を得て、幸徳と管野とに、此の 凶事を告げることにした。他の被告も、判検事も書記も

退廷し、法廷に残ったのは幸徳管野と看者一人と花井君と僕だけとであった、僕は管野をさしまねき、一つのベンチに幸徳と並らんで腰をかけさせた。連日同じ法廷に引き出されていても遠くに離れて、眼くばせ位より出来ない二人は喰つついて掛けたのだから、一寸変わった感じが起つたであらう。大審院の広い法廷は、十二月の末で薄暗い、この陰気な法廷に制服の看守一人と、聽て死刑と覺悟した二人の囚人とふたりの辨護士と相對して黙々たる時の何秒かの後、漸く花井君が口を開いて、誠にお気の毒なお知らせですが、昨日郷里のお母さんが亡くなりましたと極めて簡単に訃を傳へた、幸徳も管野も一語も發しない眼が光って口を結んで、息詰るやうな悪夢に押へられるやうな苦しい感じが一杯になった利那花井君が握手したまへ、握手したまへ、と二夕口言ふと 幸徳管野は無言で右手を差し伸ばして、堅く握手した。管野の永い牢獄生活で蒼白なっていた両頬がサツト紅潮し、兩人の眼に涙が一杯になって将に溢れんとして僅に耐えている光景、二十余年後の今日髣髴と僕の眼に映ずる。」

幸徳の手紙に此の最後の握手のことがないから君にまで知らせて置く。文章は拙づいから十分訂正して何かの序でに挿入して呉給へ。

昭和六年九月二十七日

今村力三郎

堺利彦殿

注

① 神崎清氏 一九〇四〜七九。ジャーナリスト。大逆事件研究者。『革命伝説』（一九六〇年、六八〜六九年）など。

- ② 塩田庄兵衛氏 一九二一〜二〇〇九。東京都立大学・立命館大学名誉教授。貴司山治は塩田編著『幸徳秋水の日記と書簡』（一九五四）を為子訪問前に読んでゐる。「日記」（三月七日）。
- ③ 秀子さん 管野秀子。一八八七〜一九〇七。姉を慕い紀州田辺にも同行。須賀子は刑死後、堺らによつて秀子と同じ墓に葬られた。
- ④ 寒村 荒畑寒村。一八八七〜一九八一。社会主義者。
- ⑤ 今村さん 今村力三郎。一八六六〜一九五四。弁護士。専修大学総長。大逆事件の他、多くの思想事件や疑獄事件を弁護。
- ⑥ 山川さん 山川均。一八八〇〜一九五八。社会主義者。
- ⑦ 幸徳の手紙 一九一一年一月一日付堺利彦宛幸徳秋水書簡に、「廿八日の正午の休憩時間に」云々とある（握手の記述はない）。この書簡は、改造文庫版『幸徳秋水集』（一九二九）にすでに収録されている。また、他の書簡も含めて久板卯之助が筆写した「獄中消息」一セットを今村は所蔵していた。
- ⑧ 幸徳の母 幸徳多治。一八四〇〜一九一〇。土佐国医師小野亮輔長女。薬種商幸徳篤明と結婚。秋水に面会の一ヶ月後に死去。
- ⑨ 花井君 花井卓蔵。一八六八〜一九三一。弁護士。衆議院議員。貴族院議員。黒岩周六の理想団に秋水・今村らと参加。
- ⑩ 板倉松太郎君 一八六八〜一九四〇。司法官。東京控訴院判事・検事などを歴任。大逆事件当時、大審院検事。
- ⑪ 最後の握手のこと 神崎清『革命伝説』では今村力三郎の「直話」としてほぼ同様の記述があるが、多治の死亡を急報した堺利彦と三人で相談した点、秋水と須賀子が「ならんで立っていた」点、花井が多治の死亡日時を「二十八日未明」と言う点などいくつか相違する。須賀子の日記「死出の道艸」（一九一一年一月二十一日）には、「手紙に小包に絶へず慰さめられた過去を思へば、只ただ夢といふより外は無い」とある。握手の記述はない。多治死亡前の十二月一日付小泉策太郎宛封緘はがきには「幸徳の母上に一度お目にかゝつて思ふ事を申し上げたらもう此世に心残りは何にもございませぬ」とあったが、多治は獄外で秋水の世話をする先妻師岡千代子を慮つて管野への面会は止めていた。

書簡七 昭和三十年六月二十六日

〔田園調布 30・6・27 前8―12〕

はがき ペン書

〈表〉

(宛て先) 武藏野市吉祥寺五三四 貴司山治様

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

*以下、表面下段

賛美歌の譜はうたと一よにわかつています、併しモウ年とつてから声
が出ませんし其上此節の梅雨と共にからだもわるく、声が出せませぬ
故にどうぞ其点はお断念下さいますやうに、耻かしいです、とても
く、昔の事考へいますと、いろく切れく思ひ出されます、

拝具

ためより

昭和三十年六月二十六日

今村さんの手紙のうつしはどうぞ御手許に

〈裏〉

御手紙をありがとうございます、お障りもなく何よりに存じます、
不要意な、何でもない事がおめにとまり、幸運だと思つています。
あの今村さんのは利彦病に倒れるほんの寸前とでも思ふ位の前に、
二十何年前の秋水の有さまを、最後の様子を知らせて下さつた今村
さんの御好意です。あの握手の点丈は神崎さんも塩田さんも新発見
で塩田さん大に喜ばれました。爆発物取しまり違反にもならぬ事件
にあのむごい所刑をうけた人達悲しい、エピソード、感慨無量です、
と築比地さんが仰せられたので。かん野も一しよに笑つたやうな思

貴司山治宛堺為子書簡 (全八通)

ひがしました。何しろ人が何んと云ふともエライ、婦人でしたと
ても私なんか、自分の生活にばかりとらはれて管野さんから見れば
取るにたらん女と思はれたかもしれせん、

昔から美人のシンボルとたぐえる、みどりの黒髪の丈長く、誰にも
まねの出来ないうつくしきを持つている人、につと笑ふ眼が近々と
みえるやうに思ひます。

どうぞ御都合次第にていつにてもおいで下さいませ、おめにかゝり
まして

草々

注

① 賛美歌の譜 貴司山治宛築比地仲助書簡(一九五五年四月三日付「消印
四日」)に『花散り失せては』『山路越えて』の楽譜および歌詞が同封され
ている。(↓書簡八・注⑦)

書簡八 昭和三十年七月六日

〔田園調布 30・7・6 後0―6〕

封書 便箋五枚 ペン書

〈封筒表〉

(宛て先) 武藏野市吉祥寺五三四 貴司山治様

〈封筒裏〉

(発信人) 大田区調布大塚町六〇三 近藤方 堺為

七月六日

〈本文〉

貴司山治様

堺為

おすこやで御執筆なさつていらつしやいます事御伺申上げます。私、ことしの梅雨にはめつきりからだにコタエましてツイ申上げるべき御挨拶もなまけて、ばかり申訳ございません。

折角お書き下さつた唄の原稿も無駄にさせまして相済みません、御ゆるし下さいませ。

管野さんをあなたさまのお筆で産れ出させていたゞきたいとお願ひいたします、私一生懸命に思ひ出したと思つています、大方のことは神崎さんの本塩田さんの御本、堺利彦の本の中や荒畑寒村のやありますけど其外に今世に在る人としては、生き残つた愚鈍な私が無力を耻ぢています 友達の女同志は皆んな亡き人ばかり小暮礼子は早くかくれ、大須賀さんも同く死一番相手になつて下さる大杉保子も疾くに亡き有様。

かん野さんが初め三十九年の秋ごろ私方を訪ねて下さつた時にはお被布をおつておいでゞした 品のよい婦人と見ました、

○紀州牟婁新聞毛利柴庵の招き、堺を仲に紹介役にて新聞社長代理に行きました、○東京では丸の内毎日電報の記者、尾行などに社会主義者故に首になりましたが。

四十年一月妹秀子チャン逝去、後柏木^④に世たいを持つ寒村安成貞雄^⑤なども居ました、其時に寒村の事をカツチャンノと云ふていました 先達て申ました通り至極中のよい友達か、弟のようにしてました、第三者に対して呼ぶ時は寒村といつてました、

先日のお手紙で承りまして大阪で木下尚江氏から社会主義の洗礼う

けてとありましたのを見まして成程とうなづけました、どうして三十九年私方来訪を思ひ立ちなされたのかと思つてました。

今、管野幽月所持の楽器といふ事を思ひ出しました、カンノの片身として私方に送つて来たもの、中に、あつた一つに二絃琴のありましたことを思ひだしました、

それは幽月女史が常に膝前に置いて、奏で、居たのでせう。花散りうせては唄ひながら、を思ひだしたのであります、ものは桐材にて長さ二尺、横は、四寸位だつたと思ひます、私方に運び込まれまして後堺が幽月の歌を琴の裏に書き残しました例の『くろかねの窓にさし入る日の影のうつるを守りけふも暮しぬ、』と今日まで持ちつゞけられないでどうしたか私の許にありませぬ、震災の時はありました真柄も覚えおりますが、

また此の哥あちこちに堺が書き散らしましたけど今はどこにも見当りませぬ、

それにつけてもあの可哀そうな幽月女史、今一度、あなたの御筆力で此世に引戻しておやり下さいますなら女同志一同がどんなにか喜んで御礼を申し上げます。

あのムゴタらしいおしおきにあつて、なくなつたかん野、さん保子さんが棺のフタを明けて見たら安らかなねむり頬さへ赤みがさしは生きてるようだつたといつてました。

先づ立派な婦人です、また何か思ひだしましたらお話申上げます、

誠に失礼なこと申すけど私はモウ年で今のことでもすぐに忘れて了ひまして、耳は遠いのはつきりき、とれませんがツイヨイかげん返事して笑はれますし人様に失礼ばかりでおめにもか、れませぬ

けどいつかお見えになりましたら管野さんの事お願ひしたいと存じて居りました、
言葉が足りませんけどどうぞよろしくおねがひ申し上げます

管野幽月女史の二絃琴裏面に

堺利彦筆幽月の歌あり、

昭和三十年七月六日



メチャくの書きざま
おゆるし下さいませ、

くろがねの窓にさし入る日の影の

うつるを守りけふも暮らしぬ、幽月」

注

- ① 小暮礼子他 小暮礼子。一八九〇～一九七七。赤旗事件で重禁錮一年罰金十円、執行猶予五年となり、実兄に引き取られ運動を離れる。／大須賀里子。一八八一～一九一三。山川均と結婚。赤旗事件で小暮礼子と同じ判決を受ける。夫の郷里で病死。／大杉保子(旧姓堀)。一八八三～一九二四。堺利彦先妻美知の妹。一九〇六～一七年、大杉栄と結婚。二二年、赤瀾会に参加。
- ② 牟婁新聞毛利柴庵 正しくは牟婁新報。一九〇〇・四・一三～一九二六・四・二〇。毛利柴庵(一八七二～一九三八。僧侶。政治家)が田辺で創刊。

週刊(三日毎刊)。

- ③ 毎日電報 一九〇六・二・二二～一九一三・二・二八。『大阪毎日新聞』が東京の『電報新聞』を買収し改題したもの。大毎が『東京日日新聞』を引き受けた際、同紙に合併された。

- ④ 柏木 一九〇七年二月、大杉栄・荒畑寒村が淀橋町柏木三四二に転居。同時期、須賀子が柏木一四二に移る。秀子死亡は二月二十二日。

- ⑤ 安成貞雄 一八八五～一九二四。雑誌編集者。文芸評論家。早大在籍中、平民社に入る。寒村とともに管野の遺骸を検める。

- ⑥ 二絃琴 二弦琴とも。八雲琴・東流二弦琴などがある。前者は全長約一〇九cm・幅約一一二cm。宗教祭祀時の楽器として用いられ、後者は一般化され明治期の東京の子女に普及したという。

- ⑦ 花散りうせては 前掲築比地仲助書簡によれば、歌詞第一番は「花散り失せては薪に売られ、家貧しければ人に捨てられ、誰れをか頼みて何にか頼らん、ただ神の結ぶ愛の友あり」。ただし、「神」を「主義」と歌い替える。

- ⑧ 真柄 近藤真柄。一九〇三～八三。堺利彦娘。二二年、赤瀾会結成。二九年、無産婦人同盟。戦後、婦人有権者同盟に参加。管野の最後の手紙は真柄に別れを告げるもの。

(参考文献)

『幸徳秋水全集』『管野須賀子全集』『近代日本社会運動史人物大事典』『日本アナキズム運動人名事典』『新訂標準音楽辞典』その他各種人名辞典、辞書・事典類を参照した。

(本学文学部助教)